

# テーマプロジェクト「地域実践心理学」

——この一年の経過報告——

串 崎 真 志  
中 田 行 重

## 1. プロジェクト演習

前稿（中田・串崎，2005a）に引き続いて，経過報告をしたい。本年度のテーマプロジェクト「地域実践心理学」の活動は，大きく2つにわけられる。すなわち，正課としての「プロジェクト演習」（土曜日4時限）の授業と，心理第2実験室（コミュニティ・カウンセリング・ルーム）における日常的な交流である。

まず，プロジェクト演習について述べてみたい。授業は，主として串崎が担当した。受講生は，英語英文学，国語国文学，哲学，史学・地理学，中国語中国文学，教育学から合計11名が集まった。すべて他専修（心理学以外）所属というのが特徴である。彼らは，自専修の科目を履修しながら，そのうえで心理学を学んでいる。副専攻的な意味合いが大きい。

プロジェクト演習では，「いわゆる心の問題と総称される臨床心理学的な諸問題を，利用者（ユーザー）の立場からとらえなおす」ことを目標とした。その理由は，次の通りである。これまでの臨床心理学教育は，どうしても資格志向が強くなる傾向があった。もちろん，臨床心理学を学んで専門家になる人はたくさんおり，それを否定するつもりもない。しかし大多数の学生は，卒業後にさまざまな職種で活躍し，一市民として地域で暮らす。したがって，資格を強調するだけの（また，そのように学生を仕向ける）教育では，偏ったものに

なるだろう。

むしろ、私たちに必要なのは、ひとりの市民として「心の問題」をどう受けとめるかであり、自身あるいは身近な人がそのような問題を抱えたときに、専門家（専門機関）をどう利用するか、という視点ではないか。学部の臨床心理学は、とくにこの方向性、ユーザー教育が大切だと考えたからである。

とはいえ、地域実践心理学の基礎は、臨床心理学にある。したがって、その知識や技法も、きちんと教える必要があった。そこで春学期は、臨床心理学の諸学派、カウンセリング技法、心理検査法、質問紙調査法などについて、心理学専修と同程度の内容にとりくんだ。また、教育センターや児童相談所に勤務している卒業生を招き、ディスカッションする機会を設けた。あるいは、ゼミ合宿を心理学専修生と合同で実施し、専修を超えて交流する試みも行なった。心理学について白紙状態であった受講生たちも、関心は高く（心理学をまったく受講したことのない学生もいた）、教える側にも新鮮な驚きと発見があった。秋学期は、とくに子育てや教育など、子どもにかかわる問題を中心に、各自でテーマを設定するところから、調べ、発表するという一連の所作にとりくんでいる。

他専修の高度な内容にもかかわらず、受講生たちの意欲は高かった。11人という小規模のゼミであったことも、幸いしたのだろう。専修が異なるため、全員の揃う時間が確保しにくいという難点があったが、土曜日4時限という時間割に対する不満を除いて、受講生の満足度はたいへん高いように感じる。来年度の卒業論文にどう結実するか、楽しみである。

## 2. 心理第2実験室における活動

前稿（中田・串崎, 2005a）で紹介したように、心理第2実験室（コミュニティ・カウンセリング・ルーム）では、学期を通して、さまざまな活動が学生主体で開催されている。2005年度前半（4月～10月）の利用状況について集計したので、表に示しておこう。

「1. 授業」は、「心理学演習」などの授業を行なった回数である。「2. 調

「査実験」は、卒業論文や修士論文の調査や実験の目的で、訪れた人数である。「3. 自主勉強会」(後述)とは、正課以外で、学生たちが自主的に勉強会を行なったときの利用者数である。「自閉症支援」(後述)とは、地域に暮らす自閉性障害の子どもたちを支援する活動に参加した人数である。「5. 地域ふれあい交流」(後述)とは、地域に暮らす高校生とのふれあい活動に参加した人数である。「居場所」(午前・午後)は、学生同士の交流の場として利用した人数である。「8. 資料利用」とは、心理第2実験室に配備されている、過去の卒業論文や図書を閲覧する目的で、来室した人数である。

結果として、半年でのべ1937人という利用者数は、かなりの数といえよう(しかも7月下旬～9月下旬の夏期休業中は閉室)。月ごとの推移を見ても、毎月の利用が一定していることがみてとれる。このような運営が可能なのは、ひとえに学生たちのニーズと、それを支える定時職員たちの尽力によるところが大きい。本稿の後半では、上記の活動から、「自主勉強会」「自閉症支援」「地域ふれあい交流」の3つを選んで詳述したい。

表 心理第2実験室(コミュニティ・カウンセリング・ルーム)の利用(2005年4月—10月)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	総計
1. 授業	35	105	69	25	20	25	279
2. 調査実験(卒論修論)	10	2	13	12	0	26	63
3. 自主勉強会	26	65	101	55	7	28	282
4. 自閉症支援	41	70	121	61	20	103	416
5. 地域ふれあい交流	29	58	64	37	10	31	229
6. 居場所(午前)	20	27	68	59	26	58	258
7. 居場所(午後)	34	26	26	74	30	88	278
8. 資料利用	20	23	59	19	3	21	145
総計	215	376	521	334	116	375	1937

注:「授業」はのべ使用回数、それ以外はのべ人数を示す

### 3. 自主勉強会

心理第2実験室では、大学院生や定時職員が、定期的に自主勉強会を実施し

ている。今年度のテーマは、「新版K式発達検査2001」「トライアル・カウンセリング」「自己愛研究：心理学の研究を学ぶ」「プロジェクト・ヒルガード：心理学を英語で読む」などであった。これらの一部は、大学院の授業の一環として行なわれた。詳細は、串崎・永井ら（2006）「大学院生によるプロジェクト型演習」を参照してほしい。担当者が曜日と時間を設定し、参加学生からの提案も取りいれながら、継続的に実施している。自由な雰囲気、和気藹々と学んでいるのが特徴だろう。学生にとっては、通常の授業よりも身近な時間となっているようだ。議論がしやすく、自分の興味や関心にもとづいて探求できる場となっている。参加者は、多くても10人程度の小グループで、人数が多い場合は、曜日や学年によって2分割するなどの工夫をしている。

グループ・ワークも盛んである。大学院生による「構成的グループ・エンカウンター」や、定時職員によるベーシック・エンカウンター・グループが行なわれている。前者については別稿で述べたので（串崎・永井ら，2006），本稿では後者を説明しよう。

グループ名は「みんなの居場所」。学内の関係者を中心に、年齢、性別、立場の異なる者が集う。コ・ファシリテーターを学外から迎え、複数の視点で運営した。構造は柔軟にし、メンバーを固定せず、毎回、参加したい者が参加する。メンバーの紹介によって、学外からの参加者も歓迎している。そのことも、メンバーにとって、よい刺激になっているようだ。固定メンバーのグループと比較して、深みに欠けるきらいはあるが、「気軽に参加でき、卒業しても、いつでも戻ってこられるような安心感」を目標に実施した。

自主勉強会やグループ・ワークの成果として、そこでの出会いが、当該活動を超えて、日常の人間関係に広がっていることがあげられる。たとえば、勉強会の会話から、音楽のバンド活動をやろうという企画が生まれたり（なぜそうなるのかはわからないが）、別の勉強会では、メンバーでオリジナル・ロゴ入りのTシャツを制作しようという話になったようだ。また、エンカウンター・グループにおいては、大学生ではない同世代と話したり、年齢の離れた社会人と話す機会にもなっている。立場の違いを感じると同時に、お互いの日常につ

いて関心をもち、それが、ひいては自分自身の生活をふりかえるきっかけになっていく。そして、次の会合(再会)を楽しみにするといった、よい交流が生まれている。

#### 4. 自閉症支援

藤井稔教授の指導のもと、大学院生と学部生を中心に、地域で暮らす自閉性障害(または自閉傾向)の子どもたちに支援を行っている。その始まりは、関西大学自閉症児研究グループという、文学部旧教育学科を中心としたサークルであった。30年ほど前に、吹田市の保健所から自閉症児の紹介を受けたのが最初らしい。その後、歴代の学生によって脈々と受け継がれ、現在に至るという。毎週、火曜日と水曜日の午後1時間ほど、主として行動療法的アプローチにもとづいて指導している。なお、自閉性障害ならびにその具体的支援については、Fujii (2005) に詳しい。

今年度は火曜日に1人、水曜日に3人の子どもたちが来室している。なかには4歳から12年間にわたって、通っている高校生もいる。うれしいことに、ほとんど無かった言葉が出始め、一方通行になりがちだったコミュニケーションも双方向になるなど、大きな変化がみられている。

心理第2実験室(コミュニティ・カウンセリング・ルーム)が整備されるにつれて、待合室での母親やきょうだいの過ごし方にも、変化があった。たとえば、子どもたちの活動を見守るだけでなく、ゆったりとくつろげる空間で、母親同士が自分たちの会話を楽しんだり、活動後、子どもや学生たちと交流してから帰路につく家族も増えた。活動後、1時間にわたって、好きなCDを聞いてから帰るようになった高校生もいる。このような支援活動以外の情報交換や会話から、子どもの活動中の様子を伝えるニュースレターを作ろうという企画も生まれた。

使用する教材づくりも、学生たちで行なっている。このような共同作業も、人とのつながりを実感する貴重な時間となっているようだ。コミュニティ・カウンセリング・ルームのような遊びのある空間からは、しばしばよいアイディ

アが生まれる。それは、30年の歴史をもつ自閉症支援にも、十分に貢献しているといえよう。

## 5. 地域ふれあい交流

人との関係を求めながら、それをうまく構築できない悩みをかかえる若者は多い。コミュニティ・カウンセリング・ルームでは、そのような若者と大学生が交流することで、何か寄与できないかと考えた。そこで、地域に暮らす高校生が、週1回1時間ほど来室し、大学生たちと会話を楽しむという試みを行っている。主として中田の指導する3～4回生がチームを組み、昨年度からスタートした活動である。今春からは新3回生も加わり、来年度も受け継がれる予定である。

開始にあたっては、まず母親から情報を得た。本人は、家族以外の対人関係が難しいようで、人ごみではパニック状態にもなるという。活動は、2004年11月から2005年10月までで34回、実施した。成果としては、まずなによりも、本人がこの活動を楽しみにしていることがある。しかも、自宅から一人で通ってくるようになったことは、特筆すべきだろう（中田、2006）。

多数の大学生がひしめく道を、ときには新生に間違われ、クラブ活動の勧誘を受けながらも、通い続けたという。これには、母親も驚いたらしい。当初、あらゆることに遠慮がちだったが、次第に心を開き、ときには甘える様子さえ見せるという。遠慮がちながらも、自分の希望や意思を、しっかりと伝えるようになってきた。最近では、新たに加わった学生や、別件で来室している学生に対しても、自分から話しかけるなどの積極性が見られる。

活動そのものは、本人の意向も確かめつつ、そのときどきに応じて設定している。当初は折り紙やカード・ゲームが中心であったが、最近では、絵を描いて「しりとり」で会話するなど、複雑な遊びをこなしている。また、本人からのリクエストによって、学外や夏休み中に実施するなどした。学生たちの誠実な対応によって、信頼関係が培われた証拠であろう。

若者を支える目的で始まった活動だが、参加した大学生が得るものも大きい。

この種の活動では、成長するのは子どもたちだけではない。私たち大人も、子どもたちの配慮ややさしさに何度も助けられる(串崎・望月・永井, 2006)。学生たちは、そのような相互作用のなかで、「受け手」としての自分と、「与え手」としての自分を自覚するのだろう(串崎・永井ら, 2006)。「ケア」と「プランニング」の力が養われるといってもよい(串崎, 2005)。

誰かの役に立てるというやりがい。皆で協同することの楽しさ。お互いに信頼し、頼りにされる経験。他者の成長を共にすること。これらすべてが、学生たちの自尊心を支え、自信の源になっている。この「学びあい」の姿勢こそ、「地域実践心理学」(中田・串崎, 2005b)の大切な感覚だろうと思う。

## 6. 今後の課題

以上をまとめて、コミュニティ・カウンセリング・ルームの機能を5つ指摘しておこう。すなわち、(1) 教育研究上の情報交換、(2) 自主勉強会、各種支援活動などを行なう多目的ルーム、(3) 定時職員、大学院生、学部生による学年間交流、(4) 学内の親しい人間関係を形成する居場所、(5) 地域との交流の窓口。ここではとくに、(4)について考察したい。

高校までと違って、大学には、クラスや教室などの決まった居場所がない。そこで、コミュニティ・カウンセリング・ルームを学内での拠点と位置づけ、毎日のように来室する学生もいる。潜在的には、多くの学生がこのようなニーズをもっているのだろう。とりわけ周囲に安定した人間関係を得られていない学生にとっては、ここに来るだけで学習意欲が高められるなど、安定した学生生活のための実質的な支援にもなっている。

もうひとつの特徴は、学生それぞれが、自分のニーズにあわせて利用可能なところであろう。学生たちの心は、揺れ動きやすい。そのニーズも日々変化していく。それに対応できる柔軟さが、この部屋にはある。

一方、利用者数の増加につれ、異なる活動が同時進行する状況も増えた。それゆえ、落ち着かない空間になってしまうことも、しばしばある。また、多様な学生同士が会うことによる摩擦も、ないわけではない。支援的な場所とは

いえ、人と人が接する軋轢は、いつも起こりうる。それを、痛みを伴うトラブルと感じるか、自分にとってプラスの刺激と受けとるか、学生によってもずいぶん異なるだろう。

このような状況では、定時職員の役割が重要となる。学生のニーズを感じ、全体の空気を読みつつ、「今、ここ」での経験を尊重する。ときには、さりげなく「交通整理」を行うことも必要だろう。定時職員には、このようなグループ運営の高度なスキルが求められる（願わくば、彼らの待遇がもう少し改善されるといいのだが）。

前稿（中田・串崎，2005a）でふれた課題のうち、LAN環境の整備などハード面では、ずいぶん改善された。今後はソフト面、すなわち実質的な運営が課題となろう。懸念される状況は、コミュニティ・カウンセリング・ルームが多くの学生に認知されるほど、逆に、このような空間を必要としている学生が利用しづらくなるという、皮肉な現象だ。いろいろな学生が「同居」している現在の状況が、いっそう意義をもつと同時に、いずれは飽和状態になることも予測される。多様な学生が「共生」するためには、活動の重点をどこにおいていくのか。今後も臨機応変に対応していきたい。

## 文 献

- 串崎真志 2005 大学生による支援 平成16年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書（関西大学大学院社会学研究科），45-48.
- 串崎真志・望月直人・永井知子 2006 キャンプ療法 中田行重・串崎真志（編）地域実践心理学（実践編）ナカニシヤ出版.
- 串崎真志・永井知子・増田桃子・松岡成行・山村温路・吉田衣里 2006 地域実践心理学の教育：大学院生によるプロジェクト型演習 中田行重・串崎真志（編）地域実践心理学（実践編）ナカニシヤ出版.
- Minoru Fujii 2005 A Psychological Method of Learning in Autistic Children 関西大学人権問題研究室紀要，52.
- 中田行重 2006 あるボランティア活動から見た地域実践についての学び 中田行重・串崎真志（編）地域実践心理学（実践編）ナカニシヤ出版.
- 中田行重・串崎真志 2005a テーマプロジェクト「地域実践心理学」開始に向けて：準備の一年の経過報告 関西大学文学論集，54(4)，189-201.



テーマプロジェクト「地域実践心理学」（串崎・中田）

中田行重・串崎真志 2005b 地域実践心理学：支えあいの臨床心理学へ向けて ナカニシヤ出版.

謝辞：本稿を作成にご助力いただきました，文学部心理第二実験室の定時職員，小原祥子，高木優一，中田肇子，望月直人（五十音順）の皆様へ深く感謝いたします。